

“MY TOWN” うおっちゃん

歩 & 足 月 デス 定 ラ デス

Vol.89

赤穂藩と大洲藩、 その不思議なつながり

岡崎 直司

タウンツーリズム講座主宰・
近代化遺産活用アドバイザー

忠臣蔵、それは日本の歴史や文化の領域で圧倒的な定番中の定番となった物語。何故か知る人ぞ知る程度に伊予との関係性も深く、まずはその辺りから迫ってみたい。あの江戸城松の廊下で赤穂事件が起きたのが元禄十四（1701）年。その際に同じ饗応役で現場に居合わせたのが伊予吉田三代藩主伊達村豊で、浅野内匠頭が吉良上野介に刃傷に及ぶ所を取り押さえる側となっていた。また、本懐を遂げた四十七士は各藩お預けとなるが、その内の大石主税^{ちかた}ほか十名は松山藩江



赤穂城

戸藩邸に置かれる。その縁で十名の大高源吾と木村岡右衛門の二名は、その介錯をした宮原久太夫によって遺髪が松山に持ち帰られ、興聖禅寺（松山市駅裏）に埋葬された。今も毎年12月に同寺で義士祭が行われる由縁である。松山藩では義士たちを丁重に扱ったというので、後に播州赤穂の人たちは地元特産であったハゼの木を感謝の証として松山へ送り、それらは石手川土手や湯築城の堀端に植えられ、現在もそれと分かる木が残っている。

この他にも、四十七士の中でも屈指の知名人である堀部安兵衛が若い時に名を知られる端緒となった高田の馬場の決闘がある。元々伊予西条藩士同志の争いだったのが、一方の菅野が通う道場の門弟に（当時中山）安兵衛が居て、助太刀をする事に。相手を討ち果たした安兵衛に惚れた赤穂藩の堀部家が養子にする事で堀部安兵衛が誕生し、その7年後に赤穂事件となる。ことほど左様に愛媛と赤穂には様々な縁が存在する。



木柵

興聖寺の義士の墓

さてここからは、それ以外の関係性について、特に大洲藩と赤穂藩の奇しき縁についてを追ってゆく。

長浜沖に浮かぶ青島は、最近では猫の島として知られるが、実はこの島の成り立ちこそが赤穂と深い関係を秘めている事はあまり知られていない。時は寛永十六（1639）年までさかのぼる。赤穂坂越^{さかし}の漁民与七郎が一族郎党16戸を引き連れて青島に移住して来たと言われる。そもそもイワシの大群を追って周防灘に向かう途中、網入れをしたら思わぬ大漁で、この島での漁場開拓に展望が開け、大洲藩の許可により居住する事になったと伝わる。（「想い出の島」増田孫幸著より）それまでの青島は藩の馬の飼育場となっていた事もあり馬島と呼ばれていたが、与七郎たちが住むようになって翌年、殿様である加藤泰興親子を迎え鹿狩りが催され、それ以後青島と命名された。また与七郎も赤城九郎左衛門と改名し、庄屋として以後の青島を束ねてゆく。今は過疎の島だが、戦前の最盛期には900人近くが住む島として繁栄したから、やはり周囲はいい漁場だったのだろう。この島に伝わる盆踊りが



伊予灘の青島

有名で県の無形文化財指定、実はその衣装は忠臣蔵のあの装束で踊られる。きつと開島から62年後に起きた赤穂事件やその後の討ち入りのニュースがこの島にもやがて伝わり、ルーツとしての故郷の物語が島民にとっても誇らしかったに違いない。

一方、大洲藩加藤家の公文書に「北藤録」というのがあり、三代泰恒の事績も書かれていて、その中に赤穂事件についての記述がみられる。簡略に記すと、浅野内匠頭と泰恒は昵懇の間柄であり、勅使饗応役を受けた際に吉良への対応をアドバイスしていたが、あのような事件となり残念だと。つまり、石高の近い外様大名同志（赤穂5・3万石、大洲6万石）で江戸城詰めの広間（柳の間）が同じであり、年は十歳ほど泰恒が先輩、そういう関係性だった。そんなシンパシーがある藩同志という事を踏まえて次の事柄に注目したい。

大洲市郊外、肱川上流部に大川地区があり、その河畔に旧大石醤油醸造の建物（昭和14年築）が残っている。地元では「おおなる工房」の方々が古民家再生の手法でこの家の利活用に努力されている。



大石利太郎家（大石醤油）

る。かつての醤油の銘柄がナンと「義士心」。つまり、ここ大石家に伝わる資料に「その名もゆかし祖先赤穂の義士、忠臣の名に因みて「義士心」醤油を醸造し、云々、」とある。創業者の大石利太郎氏が実際にあの大石内蔵助につながるのかどうか、それは定かではないが、次のような事柄も大洲には伝わる。

市内菅田地区に西野家という旧家があり、この家がルーツは赤穂から来たと伝承されている。実は近接して成澤家、森本家があるのだが、この三家は代々出自を同じとする事で親しく近年まで親戚づきあいをして来た。従って三家ともに家紋は「重ね鷹の羽」、つまりは赤穂浅野家と同じである。勿論これもまた直接浅野家とつながるとは俄かには思えないが、成澤家が槍一本持って赤穂からやって来た、と伝わる話と共に、ナニゴトかのつながりありやと想起される。



西野家家紋・重ね鷹の羽



西野家（明治25年築）

折も折り、新たな情報が寄せられる。それは、大川地区にある定林寺に5歳で養子

に入った泰山弘道という後に海軍の軍医として活躍する人物の事。彼の略歴が記された刊行物によれば、上灘村の材木問屋7代目藤井家に生まれたが、藤井家の初代は浅野四家老の一人で討ち入りが終わって後に赤穂から落ちのびた、と。どういう縁か、大川村の寺の養子となるが、その寺は上記大石利太郎家の檀家寺でもある。不思議な目に見えぬ糸に導かれての事なのかどうか。

要するに、四十七士にはイヤと言うほど世間の目と陽が当たっているが、180度視点を変えた話をすれば、それ以外の赤穂藩士たちはその後一体どこへ消えたのか。かの事件の後、幕府の取った裁定は浅野内匠頭は即日切腹、赤穂藩五万三千石は取りつぶし、吉良はお咎めナシというものだった。改易の時点で赤穂には約3000人の藩士が居たとされている。では討ち入りに参加しなかった約250名は一体どこへ。それはどこにも確証が無く、誰も考えようとしていない歴史の綾である。忠臣蔵が世の喝采を浴び、注目されればされる程に加わらなかつた他の赤穂藩士への世間の目を筆者は考える。行く先とて無い流浪の藩士たち、そこに主人である内匠頭と親しかった大洲藩への親近感が無かつたかどうか。歴史はロマンである。